

奢おごるもの

「灯」でお知りあいになったKさんからのお便りの一節。

「私はある日の道中で興味深いものに出会いました。田舎道が忽然こっぜんと大舗装こっせんになっていたのです。それがその町の元町長の家の付近何百ひゃくだけが四車線の舗装なんです。町内は国道と県道の一部を除くとすべて一車線ですのに、我田引水がでんいんすいじみた公共工事がよくもやれたものと驚きました。後にその町長は自分のしたことで自滅じめつしましたが、それも権力の座にある者の奢りへの「神の声」でしょう」。

私は思い出す。二十年前一度だけその道を通った時のことを。車のすれ違いもできないほこりっぽい一本道、そしてあの一軒家。門入り口に二個の大石が置かれていた。目ざわりでも不自由でも、車のUターンなどで敷地が侵されなためだろう。この異様な光景に運転手がつけたした。「Aさんの家ですよ」と。A君なら私は知っている。彼らしいやり方だ。

本来小心の彼がこうも大胆にやれたのも、小は小なりに権力がさせたものだ。だれ

も初めから私欲に固まったままで権力者であることはない。

東条英機^{ひでき}は憂国の志と野心とが混合しあつて、ついに日本と自分を自滅させた。五億円を外人からもらつて断罪された「元首相」も、政治的憂国と私欲の混合体と暴露されてもお最高権力者であり続け、ようやく不慮の病でその座から降ろされだした。

国民の眼前で白昼堂々と進行するこゝろした公私混同、それが国家的規模であれ一村の出来事であれ、萌芽^{ほふが}のうち除去されなければ、肥大の一途をたどり、国民・市民の声を圧殺し、逆に国民的支持があると自他を錯覚させる。ついには何か人力を超えた「神の声」を待たねば断罪されなくなる。国民・市民にとってこれほどの不幸はない。

(一九八六年六月十七日)